

告示	番号	48	慢性心疾患
	疾病名	静脈洞型心房中隔欠損症	

静脈洞型心房中隔欠損症

じょうみやくどうがたしんぼうちゅうかくけっそんしょう

概念・定義

心房中隔欠損症は左右心房を隔てている心房中隔が欠損している疾患を言う。心房中隔欠損症のうち、卵円窩を含まない欠損で、上大静脈か下大静脈に近い部位の欠損。静脈洞型は上大静脈付近が欠損している上位欠損型、下大静脈付近が欠損している下大静脈型に分類される。男女比は2：1で女性に多く、小児期や若年成人では比較的予後の良い疾患である。肺静脈、特に右肺静脈が右心房に還流することがある。その場合には手術が難しくなることがある。

症状

この型は sinus node の機能不全や上室性頻脈を伴うことが多い。一般的に小児期は無症状で経過することが多く、心雑音や心電図異常などで健診時に発見されることが多い。しかし加齢とともに心不全症状、不整脈や肺高血圧の症状が出現する。まれに小児期に、心不全や肺高血圧を合併することがある。感染性心内膜炎のリスクは低く、予防内服は不要

である。理学所見としては、相対的肺動脈弁狭窄による収縮期駆出性雑音を、胸骨左縁第2肋間に聴取する。二音の固定性分裂を認める。相対的三尖弁狭窄による拡張期ランブルを、胸骨左縁第3から第4肋間に聴取する

治療

手術適応は非可逆な肺高血圧症がなく肺体血流比が2.0以上の時、手術適応がある。手術は幼児期から思春期の間に行うことが多いが、内科的治療に反応しない心不全の乳児例や治療を必要とする年長者も治療の対象となる。ASD 単独の手術死亡は1%未満であり、術後の遠隔成績も良好である

抜粋元：http://www.shouman.jp/details/4_42_53.html